

宝来講の夜

夕暮れが迫ってくる。具合よく宿場に着いた。「御隠居、宿はどこにとりましょう?」「うむ、どうしましょうかな」「どうせならかわいい娘ちゃんがたくさんいて、めしがうまくて、たらふく食わしてくれる所がいいな」そこへ客引き「ささ、うちへ泊まってっておくんないませ。めしはうまいものがたらふく、いい娘もいますぜ」「そうかい、御隠居ここにしましょう」「はっはっは、八兵衛にはかないませんな。それでは目印の笠を表に吊っておいてください」……こういう気楽な旅を時代劇では描き続けてきた。しかし、実際に忠実に江戸時代のような旅をしてみると、宿での時間は意外とあわただしいものだと知らされる。一方、そうした旅を現代にするがためのギャップというものもあり、これを埋めるためにも時間は費やされる。いったい黄門様はいつ洗濯し、いつマメをつぶすのか、と疑問を抱きつつ、夜は過ぎていくのである。

〔入浴〕

宿に着くと、まずは風呂に入りたい。特に雨の日は、ぬれた体を暖めるためにも、食事より先に入浴となる。ゆっくりと風呂に入り、一日の疲れを癒したいと参加者の誰もが願っているであろう。

宝来講でお世話になる宿は、旧道沿いで現在も営業を続けている、我々にとってはたいへんありがたい存在であるが、何分小ぢんまりとしており、一度に入浴できる人数は限られ、いつも順番待ちとなる。1泊目の吉野館では、まだ皆元気なので待ち時間もさほど苦にはならないが、3泊目の待月あたりになると、少しでも早く入ろうと争奪戦が繰り広げられる。待月の浴室は1つしかなく、男女が交替で入ることにしているが、例年どちらが先かは大問題となる。こうした中でも、足の汚れやすい草鞋履きの者や、体の冷えやすい完全装束組が優先されることは、暗黙の了解となっているようだ。

また、2泊目のまつや、4泊目の日の出館は女風呂の方が小さい。これは参加男女の内、人数の多い方が大きい浴室を使用するからで、男女比が常に3:1くらいであることを考えれば仕方のないことかもしれない。まつやは第3回(1988)まで待月同様、浴室が1つで、しかも現在女性が使用している小さい方(家庭の風呂と変わらない)だったので、大変混雑していた。第3回では、あまりの混雑を緩和するため、女性陣は宿のワゴン車で近くの雑貨屋まで風呂を借りに行くということもあった。第4回(1989)からは大浴場?が新たに造られて、男性はこちらを利用している。大浴場といえば、4泊目の伊勢。日の出館の風呂も小さくはないが、銭湯のように広々と大きかった宮前館の男湯はやはりなつかしい。その伊勢の夜はあとに大宴会が控えているため、入浴もあわただしいが、最終日の神宮参拝を前に清浄を欠くわけにはいかない。誰もがすばやく、しかも念入りに入浴をすませる。

このように宝来講では、ゆっくりと疲れを癒す暇もなく浴室を出なければならぬのが実際のところである。

〔フットケア〕

毎日30km前後の行程を4日間歩くにあたっては、毎晩の足の手入れが重要なポイントとなる。ここでは、傷を癒す戦士？たちの様子をのぞいてみよう。

宝来講では、多種多量の薬を準備してナイチンゲールと呼ばれる救護班（通常は女性）が管理している。宿に入り入浴を終えると、このナイチンゲールのまわりが急に騒がしくなる。湿布や絆創膏を求めてナイチンゲールの部屋を訪ねる者が競合するからで、薬箱はひっぱりだこ、薬種商ならば大繁盛といったところである。

各部屋では、足の裏に湿布を貼る者、靴ずれに絆創膏を貼る者、エアサロンパス（スプレー式消炎鎮痛剤）を吹き付ける者、マッサージクリームをぬる者、変わったところでは股ずれの手当をするものなど、それぞれ余念がない。床につく頃には、部屋中メントールの臭いが立ちこめ、臭覚が麻痺してしまうほどである。

また、靴着用組はマメができていることも多く、その日の内につぶしておかないと翌日歩くことができないため、入浴後、布団針と赤チン（マーキュロクロム液）のお世話にならなければならない。以前（第4回〔1989〕ごろまで？）はマメつぶしが見せ物となっていたため、あまりの痛さに泣き叫ぶような悲鳴、それを見物して喜ぶ歓声があちこちの部屋から聞こえていたが、最近は各自密にかつぶしているのか、あまり耳にしない。一説には、他人につぶされるのを恐れて、マメができて隠しているという。

翌朝の出発前もまた、薬箱の出番である。テーピングをしたり、マメの手当をしたり、各々足元をかためて出かける。



今は昔の、公開処刑？ならぬ「公開マメつぶし」

〔ミーティング〕

参加者の大部分はそれぞれ役割を持っている。調査であったり、記録・計測であったり、運営であったりするが、一見単純な作業に見える計測でさえも、地点合わせ・時間合わせなど、班内での確認事項は多い。しかも、出発前に5日分全ての確認しておくのは無理であるから、細かい部分は宿で、ということになる。ましてや運営に関することになれば、状況に応じて現地での変更、追加連絡などが飛び交い、夜のミーティングは不可欠である。

ミーティングの形も、第1回(1986)は現行と同様「各班1名以上の出席」「全班代表を出す」「各班の出席者から班内へは班別のミーティングで伝達」という形式であったが、第2回(1987)は参加者が倍増、役割を持たない者がかなり多くなったため、全員ミーティングに切り替えた。が、当然の如くこれは大不評で、またその必要性も薄かったこともあり、第3回(1988)からは元の形式に戻った。以後はこれを踏襲している。

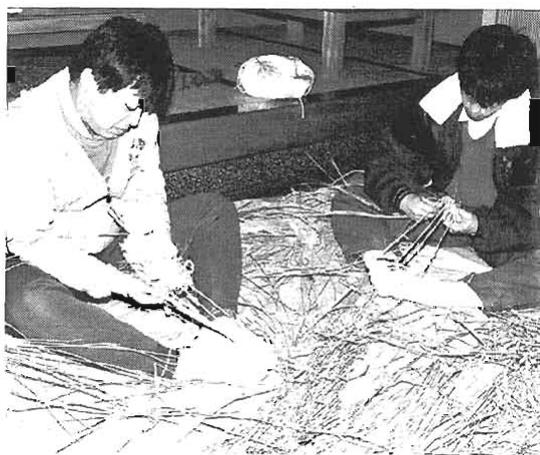
〔草鞋いじり〕

製作に時間のかかる「ワラ100%草鞋」をあきらめたり、製作法を変更して所要数を出発前に完成させたり、草鞋で踏破を目指す者たちには涙ぐましい努力がついてまわる、ということは序説でも述べた。さまざまな製作時間短縮策の内、「かえし残し」は、最初から製作の一部を宿へ持ち越す前提

での作戦であり、これを夜の内に仕上げておかないと、翌日履く草鞋がないわけである。ただ材料は全て編み込み済みで、追加材料は必要なく、竹串とハサミがあれば15~20分ほどで半成品が完成品になる。宿での15分はそれほど負担にはならないが、出発前5足一度に仕上げれば1時間を越える。十分に準備の時間をとれず「出発前のその1時間が貴重」という場合にはこの手がおすすめである。

一方「ビニジ」は、①出発前、家で編む、②出発後、宿で編む、という2つのパターンに大別される。いずれも「材料の取扱いが簡単」「製作中もワラくずなどの汚れを出さない」といった特長をふまえた作戦である。遠隔地からの参加や途中からの合流、事前に研究室で草鞋を製作する余裕のなかったOBなどには、ワラの草鞋は望むべくもないから、自宅で編んで持ってきたり、宿でござを編んでいたりと……となるわけだ。

さらに、所要数は用意できなかったが、なんとか伊勢までワラの草鞋で…と意気込む者の中には、へたった草鞋を再生しようと試みる者もいる。別の者の使用済み草鞋を自分の使用済み草鞋の底に縫いつけて、「2人3脚」ならぬ「2人3足」。2人の総数で考えれば、所要数は2日ごとに1足づつ減る。



食堂での草鞋編み（第1回 待月にて）

さらに、さらに。第1回(1986)では、草鞋の大部分を現地製作によったという経験もある。鎌田先生持参の自動車カバーの上に、3人、4人と輪になって、翌日履く草鞋を夜遅くまでかかって編んだ。吉野館・まつや・待月では食堂部分を借り、宮前館では宴会も盛りの大広間で作業をしたが、我々が出発した後、ワラの粉の掃除がさぞや大変だったのでは、と今さらながら恐縮の思い出である。

……ということで、今夜も宿の寒い玄関には草鞋いじりに精を出す者たちの姿がある。ただし、「ビニジ」は畳部屋でも作業できるので、玄関で作っているとは限らない。

【飲む】

宝来講といえば酒、といったらオーバーか。第1回(1986)などは毎夜々々の痛飲で、それこそ草鞋を作りながら飲んでいるような状況もあったが、最近は飲む事のウエイトが伊勢の夜へ移り、他の日の酒量はさほど多くないようである。翌日歩く事を考えると、好きな者でも多少躊躇するのが自然であろう。まして参加回数の多い者は、過飲で悲惨な歩き方をしていた過去の参加者（……か、自分かは知らないが）の記憶があれば、ついセーブしたくなるものだ。

一方、第6回(1991)のように気温が高いと、ビールの売れ行きが良くなる。それまで2日目のまつやでビールを捜した事などなかったが、気温の高い中、峠越えの連続でのどを潤かしたためか、到着直後から向かいの酒屋にビール詣での連中が群がった。

このほか、雨・雪の時には衣類の乾燥、草鞋組ならば足袋の洗濯などが必要になり、濡れた靴を乾かすためには、古新聞を丸めて中につめておかねばならない。サポート隊と本隊先達の間では、合流地点や途中参加者送迎の手順などの打ち合わせ、翌日の天候がはっきりしない時には、昼食・休憩地点などの変更手配など、宝来講の夜は様々な動きの中で過ぎて行くのである。

宝来講用語講座

何年もやっていけば、独特の状況を適切に表現するために、独特の用語というの生まれてくる。便利な言葉が見つければ、参加者の間に浸透するのは早い。その言葉が使われ始めた頃を知らないはずの、回の浅い参加者もいつのまにか使いこなしていたりする。当然、この道中記の中にもそうした「宝来講用語」が登場するので、若干の解説を加えておこう。

〔アーバンライナー〕

何といっても宝来講用語の白眉はこれである。旧名は「名阪ノンストップ特急」。3日目、4日目になると、各人の足の状態にはかなりの差がある。マメを多く作っている者は、休憩後、歩き出す時にかなりの苦痛を伴う。むしろ歩き続けている方が楽である。そこで「道を知っている者をつけること」「先達より先行する場合はトランシーバーを持つこと」などの条件付きながら、休憩地点を通過して歩き続ける別動隊が生まれてくる。曰く「ノンストップ特急」である。昭和63年(1988)、本物のノンストップ特急にアーバンライナーが投入されるや、こちらも改名、以来これが定着した。名詞だけでなく、サ変でも活用。「アーバンする」「アーバンをかける」などと使用することが多い。

〔吸収〕

ところが、本家アーバンライナーとは違い、宝来講のアーバンライナーは停車すべき駅を通過していき、というだけで、スピードは速くない。現実の特急と鈍行の関係とは逆に、「鈍行」である本隊が、休憩地点を通過したアーバンライナーを捉え、呑み込んでしまうこともしばしばある。マラソンでも、先行した選手がオーバーペースで体力を消耗、第二グループに呑まれるのをよく見かける。これを「第二グループに吸収されました」などと実況するが、我々もいつのまにか「アーバンライナーが本隊に吸収される」という使い方をしている。ちなみに、吸収されたアーバンライナーは、そのまま本隊の中をじりっ、じりっ遅れていき、後ろへ抜けてしまうことも多い。この場合、先行した本隊が休憩しているときに「やあ」と現れ、「ほな、先に行くわ」と通過して行き、やがて本隊が出発してしばらく行くと、アーバンの背中が見え始め、また吸収されて……という繰り返しになる。

〔上がる、下がる〕

アーバンライナーが本隊に抜かれていく…こういう状態を「下がる」という。担当する業務の都合や後方グループと連絡のためなど、アーバン以外の者が意図的にペースダウンする時も同様。逆に、調査班などが、調査地点で本隊に遅れをとったあと、猛追をかけて本隊を抜き去り、次の調査地点に先行する場合などは、本隊の列の中を“じりじり”もしくは“ばっ”と前へ出てくるわけだが、これを「上がる」という。いずれもマラソンでおなじみの言葉であり、用法もほぼ同様である。

〔弱り講〕

さて、アーバンライナーの許可条件に「道を知っている者をつける」とある以上、1日目にはアーバンライナーのような別動隊は出すことができなかった。ならば1日目、本来アーバンになるべき者たちはどうなったか？ 休憩は本隊と同時にとり、本隊の出発と共に歩き始めるのだが、ペースが出ないため、どんどん遅れる。次の休憩地点で本隊が一息ついていると、遅れていた最後尾の者が現れる。これが本隊出発の合図になるのである。結果的に、遅れた者が休憩なしのノンストップになることに変わりはないが、本隊より前に出ることはなく、随分と遅れている印象を持たれるために「弱り講」という名がついたわけである。この呼称は第2回も2日目頃までは使用されていたが、「ノンストップ特急」化して解消した。しかし、現在でも休憩省略・本隊より先行のアーバンライナーとは区分して、休み休み後尾付近を歩く場合、この名誉ある？ 称号が与えられる。

〔縄草鞋〕

なわわらじ、と読む。滑り止めのため、地下足袋の底につける網状の草鞋もこう呼ばれるが、それとはまったく関係ない。草鞋は、四筋のわら縄を「縦糸」に、わらの束を「横糸」にして編む織物のようなものである。そして、その最前部は鼻緒で引き絞られており、最後部は鼻緒を引き絞ることでやはり引き締められる構造になっている。草鞋を編んだ経験があればこれは理解しているはず。では考えてみてほしい。ずりずりと草履のような歩き方をすれば、当然最後部の磨滅は激しくなる。もし磨滅が横糸の部分にとどまらず、縦糸にまで及んだら――。縦糸が切れたその瞬間、草鞋は「向こうから差し出されたフォーク」状になる。横糸はそこに巻き付けられたスパゲティーだ。こうなった草鞋にはもはや何のストッパーもないから、横糸がなくなるまで、崩壊を続けていくのである…



こうして宿に到着したときは、一見草鞋を履いているかの如くに見えても、それは「足袋に縄を巻いているだけ」という状態だったりするのである。これが「宝来講名物 縄草鞋」。草鞋履きで完全踏破を目指す皆さん、くれぐれも注意しましょう。

〔水蜘蛛〕

草鞋ネタをもうひとつ。草鞋を履いて歩くと、最初はじゅうたんの上を行くが如く感じられるかもしれない。しかし、歩くうち次第にへたって、夕方には一歩々々の衝撃が、脳天に突き上げるようにさえ思うようになってくる。という事は、当然この衝撃を全身で受けているわけで、悪くするとひざや腰を痛める遠因にもなる。

1年目、完全踏破はしたものの、最後になってひざの痛みを覚えた坂口知世子氏(S62年度卒、当時2回生)。2年目には草鞋で完全踏破を目指すことになったが、このひざの痛みが不安だったのは当然であろう。そこで、「ひざにやさしい草鞋」を作ろうと猛然努力を始めた。まず足が直接地面に着くことを恐れて、サイズそのものを大型化。衝撃の吸収をよくするため、わら4〜6本をひと束にするのが標準の「編み材」部分を、その倍はあるかと思える太いわら束で編んでいった……。

努力の結果、「ひざにやさしい草鞋」は完成した。しかし、小柄な彼女がこの巨大な草鞋を履いたさまは、忍者が水上歩行具「水蜘蛛」を付けた姿、そのものであった。

…後日談。この草鞋には弱点があった。編み材を太くした結果、紐材に直接触れないわらが増え、締めりが悪くなっていったのである。必ず崩壊するというわけではないが、締めりが悪い分、崩壊しだすと際限がない。先頭集団が見えないほどに引き離された殿も、わらくずをたどっていけば道に迷わなかった、という「伝説」が残った。「水蜘蛛」は、その後彼女の代名詞のようにになっている。

〔千日回峰ごっこ〕

一転して、血気盛んな者の話題。叡山の酒井雄哉大阿闍梨をご存知だろうか？千日回峰で有名な行者である。師の回峰行はまさに韋駄天走り。登りの際はお付きの者が腰を押ししたりしているが、下りとなれば飛ぶように山道を駆けていく。草鞋作りや装束の準備に血道を上げる宝来講。この姿を知らない者は少ない。そこで下りとなると、この真似をする者が必ず出た。

理由は他にもある。たとえば、石割峠東側の荒れた道は「行場」をイメージさせる。自分の装束は見えないが、草鞋をはいた足元は見えるから、行者になった気分になっても不思議はない。しかも2日目ともなると、膝がわらっている時もある。ふんばりのきかぬ足には、ゆっくりと下ることが苦手だから、つい走ってしまうわけだ。もちろん、これが足に良いわけがない。我々は行者ではなく、ただの凡人。現在は「千日回峰ごっこ禁止令」が出ている。

道中人情話

宝来講は歩き旅。つらいことも多い。それをなるべく軽減しようと、事務局もさまざまな方策を考えている。しかし、それ以上に大きく励まされるのは、沿道の人々の温かさである。現代に暮らす者たちが忘れてしまったような光景が、この道には今も存在しているのである。

〔1,160円の施行〕

第4回(1989)2日目、山粕の集落を歩いていたときの出来事である。1日目、朝倉あたりより既に足を痛めていた謙信公(佐藤寛=S62年度卒OB)は、山粕専光寺での休憩の後、本隊より大きく引き離され、一人寂しく、ひたすら鞍取坂へ向けて足を引きずりながら歩いていた。

すると昭和橋の手前あたりで、ふと謙信公を呼び止める老婆がいた。買い物帰りの老婆は先行する本隊を遠目で見ており、これを伊勢参りの集団と直感したようである。そこで老婆と謙信公との会話を再現してみよう。(多少脚色あり)

老婆：ちょっとあんた、今さっき行きなはった人らと同じ人かいな。

謙信公：ええ、そうでっけど。

老：どっから来なはったん。

謙：奈良からですわ。

老：奈良からずうっと歩いて来はったんかいな。それでどこまで行きなはんの。

謙：伊勢まで行きまんねん。昔の伊勢参りを再現してまんねんわ。

老：お伊勢さんを参らはんのかい。そりゃ大変なこっちゃ。えらい足まで引きずらはって。これな、少ないけど何かの足しにして。(と、160円を差し出す)

謙：いや、そんなん申し訳ないですわ。

老：いやいや、今そこで買い物してきたんやけども、おつりでこまかいのできたさかいに、わたのほんの気持ちやから何の足しにもならんやろうけど受けとって。

謙：そうですか、じゃ遠慮なく。すみません。(と、老婆がその場を去ろうとしたとき、後ろから来る殿集団が目に入ったため)おーい、吉瀬(=S63年度卒、当時4回生)、この方に160円頂いたぞう、礼言えよう。

老：え、あの人らも一緒の人かいな。あ、それやったらこれも持って行って。(と、さらに1,000円を差し出す)

謙：いやいや、それこそほんまに申し訳ないですわ。

老：いやあなの、「情けは人の為ならず」と言うてな、今ここであんたらにええことしといたら、廻りまわってまた自分に何かええことがあるやろうて。わたのほんの気持ちやさかい、遠慮せんともろていって。

謙：そうですか、じゃ、せめてお名前だけでも。

老：いや、そんな名前聞かせるほどのことしてへんし、それに恩にきせるようなこともしとうはないし。

謙：それではこっちの気がすみまへんねん。せめてお名前だけでも聞かせとくんははれ。

老：いや、あんたらのその気持ちだけで充分やから。氣い付けて行きや。

と、老婆は去って行った。そのあと殿集団には約5分間、会話のない沈黙が続くほど感動に浸っていたことはいうまでもない。

[箱いっぱいの施行]

第4回(1989)3日目、前日に引き続き、敷津のあたりを本隊より大きく引き離されて、一人とぼとぼと歩いていた謙信公は、家(菊山家、御杖村神末3648)の前で行商の軽のバンで買い物をしている主婦に呼び止められた。以下、その会話の再現である。(多少脚色あり)

主婦：えらい足引きずらはって、どこまで行くの。

謙信公：伊勢まで行きまんねん。奈良から歩いて来て3日目で、もう足が痛うて痛うて。

主：そら大変や。ちょっとここで休んでお茶でも飲んで行き。

謙：えらいすまへん。せやけど先急がなあきまへんねん。それにあの後ろにいる2人も同じ集団ですわねん。(と、後ろから来る広瀬氏=S61年度卒=、大塚氏=S62年度卒=を指さす)

主：そうかいな。ほんならちよどええわ、これ持って行き。(と、今買ったばかりのみかんを3ついただく)

謙：いや、そんな申し訳ないですわ。

主：いや、ええってええって。そや、あんたら3人も休んでいきや。お茶でもいれたるから。

謙：すんません。せやけどほんまに先急がんとあきませんねん。もう20人ほど先に行行って、僕ら最終で、はよ追いつかんとあきまへんねん。

主：そんなたくさんいたはんの。ほんならこれも持って行ってみんなで食べてや。(と、軽のバンに積まれていた菓子パンや、シュークリーム、プリンなどを箱に詰めだして、行商の人に)あんな、しっかりつけといてや。

謙：いや、ほんま結構ですわ。申し訳ないですわ。

主：ええからええから、遠慮せんと持って行き。

広瀬：(ついに断り切れずに)そうですか、じゃ、せめてお名前だけでも。

主：そんなんええって。

(と言っている最中に、謙信公は家の表札をちゃっかり見ていた。)

一同：そうですか。それじゃ遠慮無く。本当にありがとうございました。

と、一行はその場を離れた。謙信公は下半身が既にずたずたとなっており、広瀬氏はビデオをかまえているため、一番元気な大塚氏が箱を持って行ったのは言うまでもない。

そのころ本隊は、工事中の岩坂峠(本文参照)を下るのに難渋し、残土でぬかるむ足場を固めて、ひたすら道を造っていた。そこへ後ろから謙信公が、大声で「なんか色々ともろたぞう」と叫んだので、一行は立ち止まり、その箱の中身を見て驚いた。一瞬ののち、これを持ってどうやって岩坂峠を下るか、という問題に気付き、大いに悩んだのであった。

[諸木野・大門字屋物語]

序説・本文でも何回となく登場する、諸木野の大門字屋こと、森本一文さん宅。そもそものきっかけは、第2回(1987)のとき。2日目、高井から赤壇への山越えにかかった途端、冷たいみぞれが降りだした。第1回(1986)では、檜牧甲区集会所わきの野天にシートを敷いて弁当にしたのだが、この天気ではそれを望むべくもない。しかも、その集会所自体が改築中であつた。ほかに屋根のあるところといっても、駅、バス停、役場、学校、公民館…。高井を過ぎてしまえば、そのどれひとつとしてないのである。そうこうするうち、降り方は本格的になってきた。

当時のサポート隊と先達が段取りを決めた。サポート隊は諸木野へ先行、街道沿いをあたって軒先の大きい家などに事情を話し、ともかく全員が雨のかからぬ所で食事できるようにする。場所選びはサポート隊に一任、どんな場所でも本隊には不満がないことも申し合わせた。諸木野には先達の知人もあつたが、街道から少し離れる所で、サポート隊は場所を知らない。これが最良策と思われた。

やがて、サポート隊から連絡があつた。街道沿いに場所が借りられたという。やれやれ、というの

が実感であった。突然の無理なお願いである。聞き入れてくれる家などなくても、不思議ではない。それが見つかったというだけで、ほっとした想いだった。サポート隊もまた大変だったであろう。度胸と交渉力がなければできない仕事である。

森本さん宅に到着。ありがたい、申し訳ない、腹が減った、いろいろな想いを交錯させながら門をくぐる。軒先と長屋門風の車庫に分かれて、全員が屋根の下に収まった。そこに奥さんの言葉。

「今、味噌汁作ってますので、ちょっと待ってくださいね」

え。味噌汁。といっても、こちらは30人の大所帯である。器があるだろうか。いや、サポート隊から事情を聞いて、カップを持っていることを知っているのだろう——。などなど、考えているうちに、きちんと汁碗に入って、味噌汁は出てきた。まず、驚いた。器が載った盆を、信じられない物を見るような気分で見つめた。やがてじわじわと感激がわいてきた。突然の、図々しい申し出にもかかわらず、「このみぞれの中、歩き旅とは大変なこと。何か温かいものを…」とお心遣いであった。

これ以来、森本家での昼食は続いている。基本的には「道楽」で歩いている宝来講。さぞや迷惑ではないかと思うのだが、いまやあちらでも楽しみにしていらっしゃるとのこと。我々も素直にご厚意を受けさせていただいている。

さて、第6回(1991)は異例の3月に行われた。そのせいもあってか、例年雨の印象がある森本家でも晴天に恵まれた。森本家の土間には、薄ピンクの花をたくさんつけた梅の鉢が置かれていた。我々が到着する日にあわせて満開となるよう、何日も前から天候とのかねあいを見て、咲かせてくれたのだという。これには一同感激した。淡いピンクの梅の花が一層美しく見えた。

完全踏破するために、参加者それぞれが力を出し切って努力していることだろう。しかし、自分たちだけの力で歩いているわけではないのである。沿道にあって、我々の旅を支えて下さった人たち。ずいぶんと迷惑なことに違いないにもかかわらず、我々の旅を楽しみにして下さる人たち。この人たちが抜きに宝来講を語ることはできない。伊勢の夜には、沿道の人たちにも乾杯！ である。